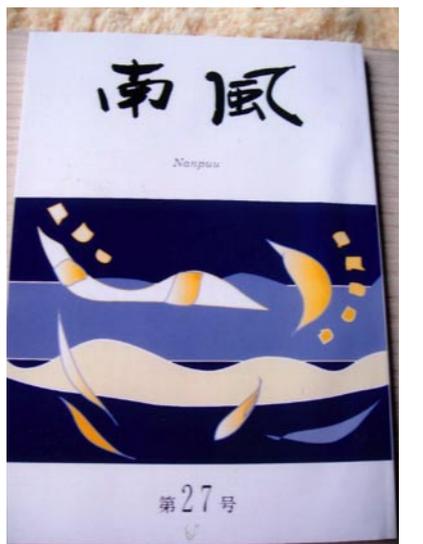


南風

福岡県

人間の姿に迫る

創作への衝動



「南風」は平成四年八月、当時、福岡朝日カルチャーの「小説とエッセイ」教室の講師をつとめられた故中村光至氏主導で創刊されたもので、会員は全受講生であった。

誌名については、当初、会員間でいくつかの候補があったそうだが、九州という南の地から風を起すという気概から「南風」に決まったと聞く。「なんぶう」と読む。

創刊号のあとがきには、現在発行人の松本文世が「不安と期待を二つながら持って新しい雑誌を発刊いたします」と書いている。そもそも物を書くということ自体が、常に不安と期待を孕んでいるので、創刊から十八年、今も毎号、発刊のたびにその思いに変わりはない。

こんな主題でいいのだろうか、この完成度で発表していいのだろうか、常に不安を持ちながら書き続け、どうにかここまで号を重ねることが出来たのは、仲間が一緒だったからに他ならない。喧々譁々の議論の末に、印刷所に渡して出来あが

りを待つときめき、人の手に渡って評価を待つ高揚のとき、そうしたささやかな期待もなければまた継続は出来なかつたはずである。

創刊当初は、詩あり随筆あり小説ありだった誌面を、今は、ほぼ小説中心の同人誌として位置づけている。いつから……という線を引いたわけではないのだが、流動の多い同人の中から、小説というジャンルだけに絞って、真摯に小説に取り組みたいという仲間だけが残って今に至った。

仲良く作品が並べばよいという初期のころに比べ、年々、作品に対する批評は厳しくなっている。他人の作品に厳しいだけ自分の作品にもそうできなくてはならず、自他の作品に対して責任ある姿勢が出来てきたということである。他人の長所だけを褒めていけば無難だが、それでは進歩はありえない。そのことを冷静に見つめ、そして批判する精神もまた合評の場で養われるのである。そうはいっても、作者は、それぞれ違った価値観を持ち、作品への愛着も思い入れもあり、そこから当然、

意見、見解の違いが発生する。同人誌の合評会はやわな精神のものには居たたまれない席なのかもしれない。しかし、自分の作品を客観的に見つめ直す良い勉強の場になっている。南風が合評会を大事にする所以である。

当初、年一回発行だったが、より多い発表の機会をとという機運が高まり、十一号平成十四年から年二回発行になった。その頃から何となくみんなの気合が入ってきたような気がする。発行回数が増えたことが、皆を追い立て、集中力が増したのだともいえる。年一回で、じっくり練って良い作品に仕上げるのが先決だとこだわる意見もあったが、時間をかければ必ず良くなるというものでもない。今では二回発行になって良かったと思っている。

おかげで新聞各紙、文芸誌等で好意的に取り上げていただく機会も増えた。福岡市文学賞、市民芸術祭賞等の受賞者も数名いて、同人各位が確実に力をつけてきている。

作品を書いて発表するということは、ただ冊子として残すということではなく、大げさにいえば世に問う作業ともいえる。同人誌で書いて、作家を目指す時代ではない。みんなそんなことは百も承知の上で、ただひたすら書きたいから書くのだが、それが自己満足でなく、多少なりとも共感を持って読んでもらえているのか、他人の批評に堪えうるものかどうか、その意味での問いかけでもある。

素人が書いた同人誌など、ひと様にお金を出して買ってもらうのは気がひけるのだが、それでもこのごろは南風にも購読会員がふえた。そんな幾人かから、このごろ本屋で売っている文芸誌の小説は、さっぱりわからないものが多い、あるいははしみじみしない、南風の小説のほうがよほど身近で胸に迫るなどと言われる。百パーセント、真に受けるわけではないが、全く当たっていないかもしないと思画自賛している。そうした顔の見えない読者からの感想などを頂けると、もっと頑張ろうと思うのである。

どちらもご同様のようだが、南風にも高齢者は多い。いや、長く続けているうちにみんなが、齢を取ったというだけのことである。齢をとると、若いときには見えなかった、人の心のあや、人生の機微、それらがよりしつかりと見えてくる。それは小説を書く上で、きつとプラスに働くはずだ。同人雑誌に高齢者の多いことは嘆くべきことではないと、開き直っても良いのではないか。書きたくても、まずは生きるために働くことを優先せざるを得なかった時を過ぎ、いま多少、時間のゆとりも出来て、小説を書くことができる、それを文

字どおり実りのときとポジティブに捉えてもよいのではないか。

創刊時からこれまで、才能を持ちながら何らかの事情で去った人、夢を持ったままで亡くなった人、彼ら彼女らの築いてくれた礎の上に今の南風がある。それを忘れずに私たちはこれからも南風を継続させるためにしつかりやっつけていこうと思う。

南風同人数は平成二十二年四月、二十七号発行時、十一名である。男女の内訳は、男三名、女八名で数の上からは女性が男性を圧倒している。福岡市在住九名、佐賀県鳥栖市在住一名、千葉県八街市在住一名である。人数からいえば決して多勢の会ではないが、熱気は中々のものである。締切りを決めて、間に合わなければ次号送り、待たない。そのため年二回、次号にチャンスはあるのだから無理をしないでと言っても、みんな目の前の号に間に合うように提出期限を守る。とにかく発表したいのである。だから、南風に限って言えば、原稿が締め切りに間に合わないということはほとんどないのである。

身銭を切ってそうまでして出すのは何故だろう。みんな表現したい何かを持っているのだ。そして書けるうちに書いておかないと若くはないのである。その待ったなしの心意気、また良きかな、ではあるまいか。

(編集委員 和田信子記)



南風 事務局

〒814-0113
福岡県福岡市城南区
田島三・一四・三 小津和方
☎092-831-6653